



### 会の活動報告 (昨年より本年5月まで)

集まった本の総数、8000冊を超す 南アフリカに既に7000冊を送付

#### ★これまでの主な送付先

- 1 ヘレン・ジョセフ女性開発センター (キンバリー)
- 2 イシナンバ地域開発センター (トランスカイ)
- 3 イーストランド教育協会 (ベノニ、ヨハネスブルグの東30キロ)

3つめのベノニの教育協会からの手紙は、南アの教育事情と本の必要な事を伝えてい  
ますので、ご紹介します。

「私のお送りした写真で地方の学校の状態がどんなものかお分りいただけると  
思います。私たちはベノニ周辺の15の学校を訪ねましたが、図書室のある学校はたったの1校で、  
しかもその図書室にはわずかな本があるだけでした。私たちの組織の有志が本を集めてい  
ますが、本の需要は私たちの収集力をはるかに越えています。あなたがたが送って下さる  
本はこんな状態の改善に大変役立つはずですよ。」

「学校教育の中核として英語を取り入れ、初等から教え始めることになります。それまで  
はアフリカの言語を優先していたので、これは斬新なことです。このことは英語の本が今  
以前にも増して必要になったということです。」

「...実際のところ、どの年代の子供にも本が必要ですので送って下さる本すべてが役に立ち  
ます。」 「文字の読めない大人たちにも本の一部が役に立つことはすばらしいことです。  
その人たちのための本が極端に不足しているからです。私たちは300人の大人のための  
識字学校を行なっています。」

★ ANC (アフリカ民族会議) 幹部のクリス・ハニ氏が暗殺され、黒人たちの追悼デモ  
と一部の暴動がマスコミによって報道されていますが、一方で新しい南アの建設を目指す  
地道な活動が日常的にこつこつと行なわれています。都市から遠く離れた荒地の黒人居住  
区で行なわれている黒人による地域の開発運動、また上記のベノニのようなメソジスト教  
会の白人による黒人のための教育活動などもその例です。私たちはそのような日常的な地  
道な教育活動を支援していきたいと思えます。

★ 南アフリカの黒人たちが依然としてアパルトヘイトの  
システムに苦しみながら建設的な活動を積み重ねていっ  
ている様子が、次ページの松本めぐみさんの報告に書かれて  
います。現在の南アで英語の識字運動がどんなに火急のこ  
とであるかもお分りいただけると思います。松本さんは今  
年1月に16日間キンバリーの近くのいくつかの村に滞在  
して反差別国際運動(国連NGO)の援助するセンターの  
活動を視察してこられました。私たちの会からも鉛筆を届  
けていただき、本が届いたことを確認してきていただき  
ました。



クリス・ハニ氏

# 自主・自立へむけた文字を取り戻す闘い

## 南アフリカ、ヘレン・ジョセフ女性発展センター視察報告

### アパルトヘイトは終わっていない

南アフリカ共和国は、アフリカ大陸の中で最も美しく豊かな国である。国民のわずか14%の白人がその他の黒人たちを暴力的に抑圧搾取するアパルトヘイトの歴史と現実がないならば、そのすばらしさは一層輝いて見えるにちがいない。国際社会からの非難と制裁に耐えきれなくなった白人政権はいわゆる「改革」路線を進めてアパルトヘイトの根幹法を廃止し、1991年6月にはデクラーク大統領が世界に向かってアパルトヘイト終決宣言をした。しかし黒人の誰一人としてそれを真に受けるものはいない。経済制裁を解きはじめたアメリカ、日本を始めとする国際経済社会の動きや、急速に反アパルトヘイトへの関心を失いつつある世界世論に背立ちながらも、黒人たちは「アパルトヘイトは終わっていない」と訴えている。人種差別法がなくなったというだけで、差別の実態は変わっていない。いまだこの国には差別と抑圧の重い空気がどんよりとたちこめ、つかの間の滞在者にさえ息苦しさを感じさせる。アパルトヘイト政策によって作り出されたバンツースタン（ホームランド）に行けば、そこでは相変わらず女性と子どもと老人が不毛の地で絶望的な日々を送っており、その空気は更に重くのしかかる。

反差別国際運動日本委員会では、これから続くであろう黒人たちの長く苦しい闘いを支援するべく、昨年6月からANC女性同盟との共同プロジェクトとして、ケープ州北部の街キンバリーに「ヘレン・ジョセフ女性発展センター」を設立した。差別的な教育の除外を最も受け、二重三重の抑圧状況に置かれているケープ州北部全体の女性のために、識字活動や子どもの教育、経済的自立のための様々な取り組みを始めている。去る1月、IMADR-JCの派遣コーディネーターとして、センターの識字教室開催地を含め2週間余をかけて北ケープ10カ所を訪問した。

### センターの活動と警察の弾圧



ルササネでの水くみ、村内に水道口は一つしかない

センターがカバーしようとするケープ州北部は、カラハリ砂漠に続く広大な半砂漠地帯である。容赦なく照りつける太陽はじりじりと膚をさし、40度を越える暑さの中を時折砂まじりの強風が吹き荒れる。南アの中でもここは最も自然条件が厳しく、黒人たちの生活状況は最も厳しいと言われる。失業率は47%と高く、出生率は南ア一、中学校を卒業できた黒人はわずか1.8%、女性の識字率は極めて低い。黒人の移動を制限していたパス法が廃止されてからは、センター周辺のスラムも拡大する一方である。地方の農耕可能な土地は白人のもので、黒人はその農園か或いはダイヤモンドや希少物質の鉱山で奴隷同様に働くしかない。それでも職があれば良い方だ。人々はかすかな希望を抱いて街へ出てくるが、その夢はすぐさま打ち破られる。キンバリーでも仕事はない。キンバリーの男の仕事はダイヤモンド鉱山かビール会社、女たちは運がよければ白人家庭の家政婦に雇われる。センター内の識字教室の教師をお願いしているセリナ・ンコモさんの夫ジョンさん（48歳）はビール会社に勤続12年で手取り600ランド。それで家族7人を養っている。「たいがいの人が会社に借金をしている。うちはそのローンがないだけでもましな方だ」と言う。しかし男も女も雀の涙ほどの賃金や奴隷的労働条件にも文句は言えない。かわりはいくらでもいるからだ。

北部のボプタツワナ（バンツースタン）では1970



センターでの識字教室



ホステルのキッチン

年代前半に各地から強制移住させられてきた人々が傀儡政権の圧政に怯えながら生きている。マゴベ大統領はいまだに「独立国」を主張し反アパルトヘイト勢力には警察の厳しい弾圧をかけている。このポプタツワナ内で「ヘレン・ジョセフ女性発展センター」の識字教室は現在2ヵ所開いているが、その教室に参加するだけでも警察の日常的嫌がらせを受ける。村人はだれもが識字教室に参加したいと思ながらも警察の脅しを恐れている。

ブラックとゾーンツリーしか視界を遮るものがない乾燥した荒地、闇に閉ざされたポプタツワナの村の夜空は、地平線近くまでの降るような満天の星が息をのむほどに美しい。にもかかわらず胸は塞いでくる。時折警察の装甲車のキャタピラの轟音が住民を威嚇するかのよう不気味に響く。白人農園や警察署と刑務所だけがこうこうと異様に明るい。この地に電気がないわけではない。水道もないわけではない。しかし不当に高すぎて黒人たちには自宅に引くだけの経済力がないのだ。

#### 奴隷同然の黒人の状況

ある晩、私達のセンターが識字教室を開いているルササネ村の男達が動くダイヤモンド鉱山の一つスミスマインに車を飛ばした。仕事を終えて夕食の準備をしていた200人余りの鉱山労働者達が「さあ、見てくれ、ここがどんなにひどいところか」とホステル(宿泊所)内を案内してくれ、即席の小集会を持った。1日10時間労働で週給50ランドだと言う。信じられずに何回も聞き直した。ホステル内での諸経費や家への交通費は自分持ちだ。ルササネ村まで往復のバス代が40ランド、従って1ヵ月に1回家に帰れば良い方だ。「こんな奴隷状態はもう我慢ならない。近々コサツ(南ア労働組合会議)の支援を求め

てストライキをする」と言って、トイトイダンスと歌声で私達を送ってくれた。立ち上がろうとする労働者たちに対して各地で襲撃事件が続く中、ANCは全国のホステル警備、安全確保を政府に要求しているところだ。

5ヵ所訪れたポプタツワナの村内で出会った唯一の壮年男性は高校の教師だった。「アパルトヘイトは終わった?とんでもない。このポプタツワナでは何ひとつ変わっちゃいない。前より悪いよ。新学期の登録が始まったばかりだが何人の生徒が学校に残れる事か。今日もそのことでくたくたなんだ。政府が又学費を値上げした。500ランドだよ。500ランド! だれがそんな金を払えるというのだ。そのためにどれだけの家庭が犠牲になることか。ここの子どもたちには未来がない。希望も持てないんだ。そんな子どもたちを白人の校長の下で教える私は何なんだ。何もできやしない。今年中にはやめてこんなところから出て行くんた。もううんざりだ。」絶望感にうちひしがれて、ほとんど泣き出さんばかりに独り言のように語る彼には、酌ましの言葉も空しかった。その後、私が泊めてもらった家の玄関先に集まり夜遅くまでゴスペルを歌い続けた高校生たちの、絶妙なハーモニーの澄んだ歌声が今も耳に残る。

#### 火急を要する識字活動

センターのディレクターを務めるミタ・セベレレさん(63歳)は「私達は今、様々な問題や困難にぶつかっている。とりわけポプタツワナの女達は自分達の方で何かをしたいと思ってもその手を後ろに縛られている。しかしどんな状況にあっても、黙って座りこんでいては誰も助けてはくれない。私達は自分達の足で立ち上がり歩き出さなくてはいけないのだ。センターやIMADRに頼るだけではいけない